

2020. 1. 10 (金)

「関西学院」というところ

難波 功 士

はじめに

社会学部の恒例として、最後のチャペルは、学部長が語るという話になっていて、私はこの3月で学部長から一応引くのですが、4年間やってきましたから、8回目で何を話そうかといろいろ考えたのですが、せっかくなので、この4年間学部長をやった経験の中で見えてきたことや、考えたことというのを話そうかなと思ったのですが、あんまりそれをやり過ぎると、愚痴や恨みつらみなど、あんまり学生に聞かせられない話になってしまうかと思ったので、そういうことではなくて、この4年間こういう仕事をやってきて、「関学って、こういうところなのかな」と初めて分かったことだとか、「関学は、この先こうあるべきではないかな」と、ちょっと考えたことなどをお話しできたらいいと思いました。テーマとしては、「関学と私」のような話をダラダラしますから、気楽に聞いてくれたらいいと思います。

私の大学時代と会社員時代

私と関学の最初の出会いは、40年前になるのですが、1980年の2月に、私は受験で関学に来ています。なぜ私が関学を受ける

ことになったかということ、本当ただ単に姉に命令されたからです。2つ上の姉がいるのですが、関学の文学部の英文科を受けて落とされていて、ものすごく関学に対する恨みをもっていて、だから、「おまえ、かたきを取ってこい」と言われるのですが、でも、受験料を収めているのだから、関学にとってはいいことではないかと思うのですが、姉には絶対服従の弟だったので受けにきました。生まれて初めて関学に入ってみて、綺麗なキャンパスだなと思いました。このキャンパスだったら、本当に家が裕福な家庭の子は楽しいかもしれないけれども、うちはそのようなことではなかったので、ちょっとこれはつらいかなと思いました。姉は最終的には大阪市大に行っていて、私は堺に住んでいて、大阪府大とか大阪市大とかをうろろうして、高校生のときはそういうところの図書館で勉強しているような子でした。当時は国公大と私立が本当に学費の差が激しかったので、キラキラしている私立に対して、貧乏で汚くてもみんな楽しそうにしている国立のような感じがあったので、関学に行ったらつらいだろうなと思っていて、国立に行けることになって良かったなと思いました。

大学に入ってから専攻も日本史を専攻しました。関学を受けたときも、文学部の日本史で

受けていたと思います。家が堺ですので、近所の農村の歴史、近世史、江戸時代が専門だったので、そのようなことを地道に調べるような大学生でした。そうしたことをやっていると、大阪で高校教員になって、地域の歴史などを調べながら、高校の先生をやるのだらうかと、私は思っていたのですが、大学4年のときに教育実習に行ってみて、「俺は教師は無理だ」と思って、そこから研究者も経済的にちょっと難しいと思ったので就職活動をしました。運良く広告会社が拾ってくれたので、80年から84年の4年間は大学生で、84年から96年までの12年間は東京に行き会社員に在籍していました。バブルに向かう頃の東京だったので、とんでもなく忙しいけれども、いろいろ面白いこともあったし、それなりに楽しかったのですが、長年働いているうちに、だんだん「俺は広告業界に向いていないな」と思ったこととか、ちょっと忙し過ぎて嫌になったこともあって、「2年間大学院に行くぞ」と言って会社を休んだのです。その間給料は出ないのですが、戻ろうと思ったら戻れるような立場にってもらって、2年間社会学系の大学院に行きました。それまで広告会社で実際に広告を作る部署に配属されて、コピーライターに任じられて働いていたのですが、広告コピーを書いているよりも、論文を書いているほうが周りが褒めてくれるし、性にも合っていて楽しいので、こちらが俺の本当にやりたいことなのだとなつて分かったのですが、2年間で貯金も食いつぶしてしまいました。7年間労働時間だけは本当にブラックとしか言いようのないような状態だったのですが、残業代はきちんとくれるので、2年間遊ぶお金ができたので、それでやっていました。そして「貯金も

なくなつたし、会社に戻ろうか」と思って、また3年間会社員を続けていました。

関学への転職

ただ、2年間修士課程に行き修士論文を書いていたので、それをいろいろな所に発表をポツポツしていき、日曜学者のようなのが31歳から34歳までだったのです。33歳のある日に、昔の知り合いからいきなり電話がかかってきて、「おまえ、いつまでも会社員をやっているつもりか」と言われて、「研究もやりたいと思っているのだけれども」という話をしたら、「ちょっとまた電話するわ」と言われて、それが最初はどういうことかも全然言わなかったのですが、あの後から聞いたら、「関学の社会学部に1人欠員が出て応募が出るから、おまえ、出す気があったら出してみたいほうがいいのではないか」というようなことを言ってくれる人がいました。昔からの知り合いが、そうやって薦めてくれるのであれば、関西に戻ることに全然抵抗はなかったのです。「それなら出すわ」と言って出しました。それが1995年ですから、阪神淡路大震災の年だったのです。その10月頃ですね、学祭期間中ぐらいい一応書類選考が通って面接に呼ばれて、会社を1日有給を取って休んでここまで来ました。瓦礫とかがまだちょっと残っていましたが、だいたい復旧しているような頃にここに来ました。

だから、関学に最初に来たのは受験生として来て、2回目は就活の面接のために来たという、そのような感じですね。運良く「来年の春から離れていいよ」と言ってくれて、私はいろいろなことであんまり運はない人間だと思いますが、就職に関してだけは割と運が

良くて、あんまり苦労せずに来られて良かったなと思っているのですが、96年の春から働くことになりました。申し訳ないですが、関学に対して強い思いを持って来ているわけではなくて、何となくフワッと来てしまって、教師という自覚もなくフワッと教壇に立つようになって、やはり教師に向いていないなと思うのですが、論文を書いたり、本を書いたり、文章を書くのは楽しいし、この仕事もいいなと思いました。なぜか何人かの人から、私は「関学の学生としてはふさわしくないし、似合っていないけれども、関学の教員は似合っている」と言われて、何を見てみんなそう言っているのか意味が分かりませんが、そう言ってくれる人がいるということは、俺は合っているのかなと思ってフワフワと働いていた感じがします。でも、ちょっと考え方が変わったのは、43歳になっていましたから、2005年とか、その頃になるのですが、43歳になっていきなり子供が、しかも2人一遍に双子で生まれたのですよ。それまでは本当に別に長生きしたくもないし、いつ死んでもいいとまでは言わないですけども、若い頃、20歳代めちゃくちゃ働いていた頃は、太く短く生きればそれでいいのではないかというようなことを思っていたのが、いきなりきちんとこの子たちが大きくなるまで生きていたいし、この子たちがきちんと育つためには、私がきちんと働かなければいけないし、そのためには職場である関学がちゃんとしておいてくれないと困るなど、そのために自分ができることがあったらやりたいなと思い始めたときには、43歳になっていました。

入試部長から学部長へ

だからといって、すぐにいろいろな関学の仕事をし始めたかということ、最初のうちは「子供が小さいからやめてください、その役職はやりませんから」というので、だいぶん断ってました。でも、子供たちが小学校に上がったぐらいから、ちょっと手も離れたので、双子だったので、どうしても私も育児にコミットしなければいけなくなかったのですが、ちょっと余裕ができた頃に、今は高大接続センター長という名前になっていますが、入試部長という仕事を振られてきて、「やりますわ」と言って、2011年の春から3年間やりました。

それが終わってから1年間サバティカルというお休み期間をもらって、入試部長の間も、負担がきついということで、授業は免除されていたのですが、もう1年授業は免除してもらって、ゼミは続けているという状態であったのですね。それが終わってまた授業を始めて、だんだん普通の教員として復帰し始めようとしたのが2015年だったと思います。でも、その年の秋に「来年の春から、おまえ、学部長だ」という話になりました。学部長がどうやって決まるか、皆さんは全然分からないと思いますが、社会学部には教授会というものがあって、非常勤ではなく常勤の立場の先生方がいらっしやいます。自分の研究室があってゼミを持っているような、ここが本務校というか、ここの専任の教員であるという人たちが50人ぐらいいて、月に1回教授会というものをやっています。2年に1回秋にみんな投票して、来年の春からの学部長を誰にするかというのを決めるのです。学級委員長を選ぶのとほとんど同じよう

な仕組みです。選ばれたら断りようがないです。任期は2年ですが、2回選ばれて4年間やりました。なぜ私になったのかというのを考え始めると怖いので、考えないようにしているのですが、クラスの嫌われ者が学級委員長を押し付けられる、ああいうやつかなと思っただけのこともあるのですが、それをあんまり考えていくと、誰も幸せにならないので考えないようにしていますが、とにかく4年間やってきました。

学部長の仕事というのは何かと言われると、ルーティンで動いていることは、周囲の皆さんがきちんといろいろな役目分担をしてくれるので回っていくのですが、イレギュラーなことや、突発的なことにどうしても対応しなければいけないことが、時々あります。あとは、大学本部や学院本部とのやりとりというのがあります。皆さんは関西学院大学という大学のことしか頭にないかもしれませんが、そこに学長という人がいて、各学部には学部長がいるというのは分かると思うのですが、さらに学校法人関西学院というのは、高校があって、中学があって、小学校があって、もっと大きな存在なのです。だから、大学全体の長が1人いて、学院全体の経営を見る理事長のような人がいて、学長や理事長といろいろな学部のことで交渉しなければいけないことがあって、だんだん大学全体や学院全体のことを考えざるを得ないような立場になっていました。その中で、「関学って、そういうところなのだ」というのが分かったことが幾つかあります。

二つの「関学」

その話を最後にしたいのですが、「20何

年も勤めて初めて分かったのか、おまえ」と思われるかもしれませんが、去年の10月ぐらいに理事長という方に呼ばれました。理事長という方は去年の4月になられたので、各部署の部署長と会って、それぞれが何を考えているのかを聞きたいとか、何か問題があったら言ってという、そういう面談の機会を設けてくれて呼ばれていきました。

今の理事長がどういう方かという、関学の中高、大学は商学部で商学研究科、その商学部の先生になって学長もやられて60〜70年もいる方で商学部の生え抜きの方です。その面談の最初の冒頭に、「中央芝生の向こう側のこと、分からないことが僕もあると思うから、いろいろ聞かせてね」というようなことを言われて、「中央芝生の向こう側、こちら側という感覚があるのだ」というのがあって、ものすごく釈然としました。私は今正門を向いていますから、私から見て右手には法・経・商とあって、こちらに文・社・神とありますね。法・経・商と何かが違うという感覚がずっとあったのですが、それが何かというの、そのときにはっきりしたような気がしたのです。なかなか言いにくいことですが、言い表しにくいことですが、一番端的な例でいうと、法・経・商・社というのは、学生の数も教員の数もだいたい同じぐらいの同じような規模の学部なのに、社だけがゼミを必修にしている、法・経・商はゼミは必修ではないです。それはいろいろな事情があってそうなっているのだと思いますが、何かそこが端的に、こちら側とこちら側の体質の違いのようなことを感じさせるところがあるのです。

もうちょっとどういうことかという、法・経・商に何となく漂っている雰囲気とし

ては、できる学生に資源を集中して、教員も手間を掛けて、そういう人たちがガッと伸びて社会的に活躍してくれたら、新たな受験生が集まってくるといふ、割とエリートイズムなどと言ってしまふと悪いかもかもしれませんが、気合を入れて対応すべき学生をガンガン熱心に育てて、それあの人たちがうまくいけば良くて、切り捨てるとは絶対に言わないですが、ゼミに入らない人たちが各学年に100人ぐらいいて、ちょっと余分に多く単位を取って卒業していくような人たちがいます。そういう仕組みを社会学部はなかなかとろとはできない、エリートイズムというよりは、底上げというか、ボトムを見るような感じがちょっとします。学生にとってみれば、ゼミ必修というのうとうしいことかもしれませんが、全部の学生に最終的にはどなたか専任の、先ほど言いました、ここが本拠地であるような先生方がとりあえず付いているという仕組みにこだわっているのは、社会学部的だなと思いました。

スーパーグローバルユニバーシティということになってから特に思うのですが、あちら側でいうと、国際的なビジネスだとか、外交だとか、国際貢献の場でバリバリできるようなエリートをできるだけ出したい、国際学部などもそちらだと思ふのですが。そういうような雰囲気と、そういう人も出たらいいとは思ふけれど、みんなそれぞれ速い・遅いがあるにしても、最終的にはみんなどうにかなってくればいいかなという感じは、こちら側かなと思ふのですよね。文学部にあった神学科が神学部になって、文学部にあった社会学部が社会学部になっています。社会事業学科というのも文学部の中にあつたのですが、それが社会福祉学科になって、社会学部の中に

あつた時期もあり、今は人間福祉になって、あと教育も含めて中央芝生の左側と右側とは、何となくですが雰囲気が違うような気がします。

もちろんあちら側から地道な社会活動家が出るかもしれないし、こちら側から国際的なビジネスやいろいろな場で活躍するような人が出るかもしれないから、それは本当に程度の問題というか、どちらが正しいということはないと思いますし、両方の原理がバランスをとりながらうまくやるのがいいのだろうなと思ふのですが。理事長が商学部出身ということもあり、これまで6年やられた学長が経済出身で、これからまた3年やられます。現学長の前がまた経済・商・商と並んでいて、ちょっとあちら側に振れすぎているのではないかなということが最近の気になっています。だから、どうしようというのは、次の社会学部執行部に託すような話になってしまふて申し訳ないですが、2つの原理がうまくバランスをとって、双方がうまくバランスをとりながらやっていくのが関学というものだと思うので、ちょっと振れ過ぎているかなということ最近思ったりもします。

「ゼミ」の教員として

そのようなことを思いながら、あるテレビ番組を見ていて、また「ハッ」と思ったという話を、最後にして終わりたいと思います。

『プロフェッショナル 仕事の流儀』という番組を知りませんか。NHKが時々1時間でやっている『情熱大陸』のような番組で、各界で働いている人、活躍している人を2〜3カ月追いかけて、その人のことをずっと語るというような番組ですが、去年放送され

て、再放送は最近だったのですが、それを見たのですが、「トップコート」という芸能プロダクションの社長を取り上げた回、誰か見たという人はいますか、誰もいない、私には何かむちゃくちゃ刺さったのですよね。トップコートという芸能プロダクションの社長は渡辺万由美さんという方で、年がちょうど一緒ぐらいだったし、若い頃は同じように広告の世界で働いていたとかというのを感じるところもありました。広告の世界で働いて、30歳過ぎてから木村佳乃さんと知り合ってから、そのマネジメントをやるところから、だんだん会社を大きくして行って、木村佳乃さん以外だと、今だと菅田将暉さんとか、松坂桃李とか、中村倫也、佐々木希、その辺が所属しています。所属タレント数は少ないけれども、むちゃくちゃ稼ぎのいいということで、今有名になっているプロダクションがあるという、その社長さんが紹介されていたのですよ。

その社長さんのいろいろなことの中で、一番まず最初に刺さったのが、芸能プロダクションの社長をやっていて何が一番楽しいかという、ある人が突然キラキラし出す瞬間に立ち会えるのがめちゃくちゃ楽しいのだというように言い方をしたのですね。私には教師の適性は全然ないと思っていたのですが、ゼミを延々とやり続けていて、時々何者でもない大学生が進路を見つけて実際にその方向に踏み出して行って、キラキラした変なオーラをまとい出す瞬間というのがあって、それを見ているのが、無責任のようですが、楽しいなという感覚は本当によく分かります。

あと、渡辺万由美さんという方は、親が渡辺晋という人ですね。渡辺プロダクションという大きな芸能プロダクションがあって、今

はワタナベエンターテインメントになっていると思いますけれども、その次女なので、その渡辺プロダクション自体は長女が引き継いでいて、次女の渡辺万由美さんは自分で芸能プロダクションを起こしたというような人ですが、そんな渡辺さんが一番気を付けていることというのは、タレントたちにとって、このプロダクションが実家のような存在であるべきだということを、どこかで持っているという話をされていました。だから、タレントさんが仕事で現場に行くときに、「行ってらっしゃい」と言うし、「おかえりなさい」と言う慣習があるということです。

渡辺プロダクションをつくった渡辺晋さんという人も、いろいろな所でタレントの卵を発掘してきたら、家に住まわせて、家族と一緒に生活して、うまく売っていったら家から出て行くというような、そのような仕組みをとっていて、実家のようにタレントに接していたということです。実際に仕事をし出して、いろいろうまくいかないことがあっても、そこに帰ってきたら、親というのはそういうものだと思いますけれども、どのように出来る悪い子供でも「いいよ、いいよ」と言ってくれるところが、特におじいちゃん・おばあちゃんはそうかもしれませんが、そのような温かい環境がない限りずっと頑張り続けられないです。キラキラし出す瞬間をずっと待つだけでも、中村倫也さんの例を出していましたが、本当に輝き出すまで10年以上かかったけれども、でも、実家としてこの子を受け入れ続けるし、契約を切らないために一生懸命ロジックを考えて何とかつなげてきたら、ある日本当にキラキラし出したという話をしていました。キラキラした人にフォーカスして、その人を伸ばすという仕事

と、そうなり出すのをちょっと待ってあげる、温かく迎え入れてあげるという、そうは言いながら全然売れずに消えていった人もたくさんいると思うのですが、そのバランスでプロダクションを運営しているという話を聞いたときに、何となくこの大学でやることや、学部の中で自分がゼミを主宰する立場としてやるべきことというのは、この人と同じようなことはやれてはいませんが、やるべきではないかというようなことを、ちょっと思ったりしました。

だから、関学というところには、強くなって頑張れという話と、そうは言いつつも、Mastery for Service ですから、どのような人に対しても温かく接しながら、みんな生きていこうよという話とのバランスで成り立っていると思います。いろいろ時と場合によ

ってズレたりするのを、バランスを取り直すようにして、これから10年勤めたいなどは思っていますけれども、何もできないまま終わって、次の人に託すようなことが多くて申し訳ないと思いながら、でも、まだあと学部長任期は3月まで残っていますので、何が起るかわかりませんので、頑張ろうとは思っています。来年1年ちょっとお休みをもらうのですが、あと10年働けるので、1年講義もお休みしますが、その間あと9年間こういうことができるなという蓄積をきちんとしたいと思いますし、ゼミはやり続けたいなと思っていたりもします。

最後は近況の報告のようになってしまいましたけれども、私からは以上です。

(社会学部教授、学部長)